中央電気倶楽部月報

2023
12
Vol.858

◎巻頭言
生誕100年「小林啓次郎という人」
／株式会社ダイヘン　代表取締役会長　田尻　哲也 氏

◎午さん会講演録
『台頭するインドとどう向き合うべきか』
／防衛大学校人文社会科学群国際関係学科教授　伊藤　融 氏

中央電気倶楽部月報
令和五年十二月一日発行　一般社団法人 中央電気倶楽部　〒530-0004 大阪市北区堂島浜二―二―二十五　電話〇六―六三四五―六三五一（代）　FAX 〇六―六三四五―六八七七

倶楽部からのご案内

新春講演会開催のご案内

令和六年の新春講演会を（一社）日本電気協会関西支部との共催で開催いたします。

本講演会は近畿経済産業局長を講師に迎えて、関西経済の未来についてお話しいただく新春の恒例行事です。

皆様方多数のご来場を歓迎いたします。

日　時　令和六年一月二十二日（月）
十四時～十五時
場　所　（一社）中央電気倶楽部五階大ホール
演　題　「関西経済の活性化について」（仮題）
講　師　近畿経済産業局長　信谷　和重　氏
＊都合により変更する場合がございます。
聴講料　無　料
定　員　一一〇名（先着順）
申込方法　倶楽部事務局に電話、FAXまたはEメールで所属団体名、役職名、氏名をご連絡下さい。お名前を登録いたします。（日本電気協会関西支部会員の方は関西支部にお願いします。）
締め切り　令和六年一月十六日（火）
ただし、先着百十名様で締め切ります。
TEL ○六―六三四五―六三五一（代）
FAX ○六―六三四五―六八七七
Eメール info-cd@chuodenki-club.or.jp

社交ダンス部二十周年記念ダンスパーティ開催

去る十月二十八日（土）に社交ダンス部創立二十周年の記念パーティを、五階ホールにて行いました。

参加者とスタッフを合わせて一〇〇人を超える大盛況のパーティとなりました。パーティではご指導いただいている今枝先生と黒木先生による美しいダンスや、ダンス部部員全員によるフォーメーションダンスなど、ムービングライトに照らされて見る楽しみも盛り込まれ、参加者の満足度の高いパーティとなりました。

多くの方の努力と協力に、改めて感謝の意をお伝えいたします。

「えれき亭」からのお知らせ

「スタンディングねぎ鍋」

いつもお世話になり、ありがとうございます。

本館地下一階「えれき亭」にて新メニュー「スタンディングねぎ鍋」のご提供を開始させていただきます。

「えれき亭」自慢の牛肉と日本三大ねぎのひとつ群馬県産下仁田ねぎのふたつの甘味を是非ご賞味ください。山形県産だだちゃ豆の付出しつきで〆はうどんとなります。一人前四、八〇〇円（税込み）です。ご予約お待ちしております。

「スタンディングねぎ鍋」
一人前4,800円（税込み）
※写真は二人前です。

中央電気倶楽部月報

5階大ホール「グランドピアノ」

目　次

12月のスケジュール ── 2
1月･2月の予定
年賀交歓午さん会案内 ── 4
巻頭言 ── 5
絵画 ── 6
講演録 ── 7～16
倶楽部だより ── 17
同好会だより ── 18～19
倶楽部からのご案内 ── 20

創　　立：大正3年11月
建物（本館）：昭和5年竣工
会 員 数：1,415名

法人指定会員 1,184名
個 人 会 員 231名
（R.5.11.末現在）

十二月のスケジュール

一	金	午さん会　講演『アメリカンフットボールの魅力 ～チームスタッフの視点から～』 パナソニック株式会社 リーガルセンター　主務　園部　友美　氏
二	土	撞球部例会 第七十四回 大阪倶楽部・中央電気倶楽部 懇親将棋競技会（於 中央電気倶楽部）
三	日	
四	月	青年会総会・忘年懇親会（特別会議室・えれき亭）
五	火	
六	水	電寿会例会（三一六号室） 絵画部（水彩画）（B一〇号室） 社交ダンス教室（B一〇号室）十七時～
七	木	写真部審査会（二一三号室）
八	金	午さん会 講演（仮）『国際紛争の前段階としての サイバー攻撃に対するわが国の現状と課題』 NTT　技術企画部門 セキュリティ&トラスト室 チーフ・サイバーセキュリティ・ストラジスト 松原　実穂子　氏 電壮会 十五時三十分～十六時三十分　特別講演会（五一一号室） （仮）『三十八年ぶり日本一の阪神タイガースの強さ ～現場取材担当記者が語る～』 産経新聞　大阪編集局運動部次長 嶋田　知加子　氏 十六時三十分～十七時　総会（五一一号室） 十七時三十分～十九時十分　忘年コンサート（五階大ホール） 『愛と祈りのXmasコンサート』 橋本　今日子　氏　他三名 十九時三十分～二十時三十分　懇親会（三階大食堂）
九	土	囲碁部例会
十	日	
十一	月	食堂委員会（特別会議室）
十二	火	文化・集会委員会（特別会議室）
十三	水	社交ダンス部総会（二一三号室）・忘年懇親会
十四	木	
十五	金	午さん会　講演『紫式部と藤原道長』 京都先端科学大学　人文学部 教授　山本　淳子　氏
十六	土	麻雀部例会（麻雀室） いなづま句会・忘年懇親会（三一七号室・特別食堂）
十七	日	
十八	月	図書委員会（特別会議室）
十九	火	ゴルフ部例会（宝塚GC）
二十	水	理事会（WEB）
二十一	木	
二十二	金	午さん会　休会 テナント代表者懇談会（二一四号室・特別食堂）
二十三	土	初・中級者向け囲碁教室（十時～十二時・二〇五号室） 囲碁部指導
二十四	日	
二十五	月	
二十六	火	
二十七	水	
二十八	木	午後から休館
二十九	金	休館日
三十	土	休館日
三十一	日	休館日

※予定変更の場合は改めて連絡いたします。

年賀交歓午さん会（予定）

◎一月十七日（水）
公演「新春を寿ぐ和楽器の調べ」
菊井箏楽社　菊井　松音　氏

新春講演会（日本電気協会関西支部･中央電気倶楽部共催）

◎一月二十二日（月）十四時～十五時（五階大ホール）
講演（仮）「関西経済の活性化について」
近畿経済産業局長　信谷　和重　氏
（都合により変更する場合がございます。）

一月の午さん会講演（予定）

◎一月十九日（金）休会
◎一月二十六日（金）
講演（仮）『美食地質学
～和食と日本列島の素敵な関係～』
神戸大学　海洋底探査センター客員教授
ジオリブ研究所　所長　巽　好幸　氏

○ 年末年始休館日のお知らせ
十二月二十八日（木）午後から休館
一月四日（木）より平常どおり開館させて頂きます。

二月の午さん会講演（予定）

◎二月二日（金）
講演（仮）『カーボンニュートラルな発電について
～水素発電とアンモニア発電を中心に～』
近畿経済産業局　資源エネルギー環境部
カーボンニュートラル推進室長　織田　貴士　氏

◎二月九日（金）
講演『自然災害発生時の列車乗客
閉じ込め問題を考える
―昨冬の京都駅周辺で発生した事例を中心に―』
関西大学　社会安全学部
名誉教授　安部　誠治　氏

◎二月十六日（金）
講演（仮）『日本政治の問題』
NHK放送文化研究所
主幹　島田　敏男　氏

◎二月二十三日（金）休会

午さん講演会にご出席のおすすめ

毎週金曜日の午さん講演会は、下記の要領で開催いたしておりますので、多数ご出席ください。

出席資格：倶楽部会員およびご同伴の方、会員会社の社員の方
時　　間：12時～13時40分頃（講演12時40分～13時40分）
場　　所：3階大食堂
食 事 代：**一人会員2,200円（税込）**
非会員2,500円（税込）
予　　約：不要
着　　席：自由着席

令和五年度　秋の叙勲受章者芳名

旭日中綬章

客員・法人指定会員
元 当倶楽部理事長
元 阪神高速道路株式会社 会長
田中　宰　殿

ご受章誠におめでとうございます。
会員一同心からお喜び申し上げます。

年賀交歓　午さん会　ご案内

一、日　時　一月十七日（水）十二時から
一、会　場　当倶楽部三階大食堂
一、次　第　・加藤理事長挨拶
・受章者紹介
・受章者謝辞
・祝宴（十三時三〇分頃閉宴）
「新春を寿ぐ和楽器の調べ」
菊井箏楽社　菊井　松音　氏

○多くの皆様のご出席をお待ちしております。
なお、準備の都合上、事前に事務局にお申込み下さい。

巻頭言

生誕一〇〇年「小林啓次郎という人」

（株式会社ダイヘン　代表取締役会長）
田尻　哲也

来年は私が最も尊敬する経営者小林啓次郎の生誕一〇〇年にあたるので、最近機会があるたびに氏の考え方やエピソード等を社内外で紹介している。

小林啓次郎は大阪変圧器（現ダイヘン）の創業者小林愛三の次男として一九二四年大阪に生を受け、大阪大学で電気工学を学び、一九四七年大阪変圧器に入社して、溶接機事業部長、社長室長等を歴任し、一九七七年社長に就任した。

氏の功績はまず、今や大黒柱に育った産業用ロボットと半導体製造装置用の高周波電源システムの開発・事業化に挑み、赤字続きであったが決して諦めずにやり通したことである。

また、ＴＱＣ活動（一九八七年デミング賞受賞）を牽引し、全社で企画・開発・生産・品質管理・原価管理などの各機能を統計的手法等の活用でスパイラルアップした。

当社は今もこの時勉強した「方針管理」を各事業部の事業計画の進捗管理に大いに活用している。

このような事業面の事柄以上に私が氏を尊敬するのは「会社は何のためにあるか」という目的観である。

小林は〝株主至上主義〟の真っ只中の一九八五年、新社名披露式典の社長挨拶で「…最後に、私は常々、私たちは何のために働くかということに思いをいたしますが、究極のところみんなの幸せのためと考えております」と述べた。この「みんな」というのは間違いなく今でいう「ステークホルダー」のことだった。

小林啓次郎
（1980年 56歳の頃）

また、若手部長時代の一九六一年に東京証券取引所への株式上場を取り仕切ったが、それ以降「Ｇｏ Ｐｕｂｌｉｃ、脱オーナー家」を自ら主導し、「もう個人商店ではない。世の中の要請を聞こう」が口癖であった。

現在私たちは、脱炭素や労働力不足などに貢献する製品システムを通じて社会のサステナビリティに寄与すると同時に、それによって得た利益を「幸せの目標値」に沿ってステークホルダーに還元・リターンして信頼関係を深めることこそが会社の持続可能性の絶対条件だと考えているが、そのルーツは四十年前にあったのだ。

仕事を離れるとお茶目でユーモアに溢れた愛すべき人であった。お酒は一滴も飲めないが、得意の手品と軽妙洒脱なトークでお客様の心をつかみ、大好きな麻雀ではポケットマネーで買った図書券をどっさり積んで、上がった人がその都度そこから取っていくやり方で皆を楽しませたと聞く。

会社の近くの商店街を歩くと多くの人がにこやかに挨拶するし、カラオケが大好きで照れながら唄う「街の灯り」は絶妙だった。

亡くなって十年経つが、ほとんどの社員の名前を覚え彼らの幸せを願い、サプライヤーや販売店だけでなく地域の人々にも愛されたこの人のことを私たちは忘れない。そしてこれからもずっと語り継いでいくつもりだ。

「静物」　個人会員　大塚　晴造　君

作者のひと言

近所にスケッチに出るのもおっくうで、果物入れの器に、そこらから集めたりんご・レモン・柿などを盛り、リキュールのビンと、以前百貨店で開かれていたイタリア展の紙袋がとても気に入って、とっておいたのをバックに置き構成しました。

（絵画部　大塚　晴造）

午さん会講演録

『台頭するインドとどう向き合うべきか』

防衛大学校人文社会科学群国際関係学科
教授
伊藤　融　氏

伊藤　融 氏　プロフィール

略　歴　1969年　広島県生まれ
中央大学大学院法学研究科政治学専攻
博士課程後期単位取得退学
広島大学にて博士（学術）取得
2009年　在インド日本国大使館専門調査員、
島根大学法文学部准教授等を経て、
防衛大学校に勤務
2021年　防衛大学校人文社会科学群国際関係学科教授

専　門　国際政治学
現代のインド外交・安全保障問題、南アジアの国際関係について詳しく、メディアの取材に数多く応じている。

著　書　『新興大国インドの行動原理
―独自リアリズム外交のゆくえ』
（慶應義塾大学出版会／2020年）
『インドの正体―「未来の大国」の虚と実』
（中公新書ラクレ／2023年）
笹川平和財団国際情報ネットワーク分析IINA
（https://www.spf.org/iina/author/toru_ito.html）
に定期的に論考を寄稿

～はじめに～

突然、国名を「バーラト」に変えるという話が出てきたり、G20サミットの議論の最中、モディ首相が机を叩きながら「まとまりました」といきなりいい出したりと、今、インドは話題に事欠かない国となり、いろいろと注目されていますが、一方で「よくわからないことが多い国」ともいわれたりしています。そのインドという国をどういうふうにみていけばよいのかということをお話ししていきます。

～ロシアの非難を　避け続けているインド～

ロシアによるウクライナ侵攻が始まって以降、日本でも「インドはよくわからない国だ」といわれるようになりました。**今回のG20サミットでもインドは一貫してロシア非難を避け続けました。国連でもQUADでも、あるいは日印二国間の首脳会談でもインドはその立場を取り続け、それどころか、西側を中心としたロシアへの経済制裁にも一切加わりません。**さらには、**ロシア産の安くなった原油を大量に購入しはじめました。**距離的に離れていますから本来はロシア産の原油を購入しても採算がとれないのですが、世界的な原油高によりディスカウントされたロシア産原油を購入する意味が出てきたというわけです。さらには輸入したロシア産原油を精製し、他国に売っていることも明らかになりました。また、**世界的な食糧価格の高騰のなかで、インドはロシアから肥料を大量に購入しています。「インドはどっちを向いているのかわからない。ふらついている」というふうに、**

今年の初め、バイデン大統領も言及しています。

日本の自衛隊関係者にとって衝撃の出来事も起こっています。**航空自衛隊が国連の依頼を受け、ウクライナ難民を支援するためにインド国内にある倉庫で資材を積み込み、そこからウクライナへ運ぶという計画を始めようとしたとき、突然インドが「自衛隊機の受け入れは認められない」と拒絶をしました。**これにより、本当に日印は協力関係にあるのか、戦略的パートナーシップは本当に存在するのかということが大きく疑問視されるようになりました。

それでは、**インドはロシアの味方なのかといえば、そうでもありません。**去年秋、ウズベキスタンのサマルカンドで開かれた上海協力機構首脳会談に合わせる形で、モディ首相がロシアのプーチン大統領と会談しました。上海協力機構というのは中国、ロシア、インドも含む中央アジアの国々等で構成している地域協力組織です。このとき、**モディ首相はプーチン大統領に対して「今は戦争の時代ではない」と苦言を呈しました。そして、この言葉は今回のG20サミットの首脳宣言にも盛り込まれています。**

ただ、それでもインドはロシア非難を避け続けています。昨年十二月、G20サミットの議長国をインドネシアから引継ぎましたが、インドは「ウクライナにおける戦争」という表現を用いており、「ロシア」という言葉も「侵略」という言葉も一度も使っていません。**インドは自国で開催されるG20首脳会議の中心を「ウクライナにおける戦争」の侵略行為そのものより、それによってエネルギーや食糧の価格が高騰してしまったことに焦点を当てることにし、それをインドの基本的戦略としたのです。**そして、その経済的影響を一番受けているのはインドをはじめとしたグローバルサウスの国々なのだと主張したのです。

これに乗る形で、日本の岸田総理は、国会でもアメリカでも、そしてインドでも「グローバルサウスの連携」をしきりに強調するようになりました。それだけインドを重要視しているあらわれだと思います。

今年のG20の首脳宣言から「ロシアによるウクライナ侵攻、侵略」という言葉が抜かれた背景には、インドネシアとブラジル、南アフリカの新興三カ国が連携し、首脳宣言を出す日の朝、日本、アメリカを含めた西側各国に対し、インドのこの声明案を了解するよう迫ったという経緯があったようです。「異論があれば、モディ首相に直接いってほしい。」ともいったそうですが、**日本もアメリカもドイツはじめ西側各国も、インドは重要な国だと考えているからこそ、議長国インドの顔を潰すことはできないと考え、不満はあってもインド案を呑まざるをえないという判断をしたわけです。**

～「価値」の共有という幻想～

中国の台頭は日本やアメリカにとっての真の脅威です。その中国に対抗するため、西側と価値と利益を共有している国としてインドとの関係構築が重要なのだといわれてきました。しかし、それは幻想だと私は思います。実態としては価値も利益も相当程度共有していません。**政治的にはインドは民主主義国だからということで、日本とインドは自由、民主主義、人権、法の支配といった普遍的価値で結ばれると、美辞麗句的にいわれてきました。たしかにインドは世界最大の民主主義国だといわれています。**外交の世界でもよく使われる言葉で、たとえばアメリカとインドの首脳会談の際には「世界最大の民主主義国と世界第二位の民主主義国とは当然のパートナーだ」といっています。今、インドの人口は中国を上回りました。ついこの前まで人口ナンバーワンだった中国は、人口は多いけれども民主主義国ではない。その意味で、世界最大の民主主義国はインドであり、それはインドの誇りだとされているわけです。

インドの有権者数は九億人です。その規模で民主主義を行っているのですが、人口は十四億人に対しまだ五億人の有権者が控えており、つまり、選挙によって政権交代が起こりうるチャンスがあるのは事実です。第二次世界大戦後のアジアにおいて、クーデターや王族の独裁政権を経験したことのない国は日本、インド、スリランカの三カ国だけです。それ以外の国は、少なくとも一度はクーデターが起きたり、王制になっていたり、非民主主義的な政治体制を経験しています。韓国も東南アジア諸国も、アジアの多くの国々は初期に、開発独裁、つまり強いリーダーのもとで大きな道路などインフラを整備したり、外資の工場を誘致するといった開発を進めるなかで基本的な権利侵害が発生し、やがて民主化運動が始まるというのが通常のパターンでした。

一方、**インドは一九四七年の独立以来、一貫して議会制民主主義体制を維持してきた希有な国です。インドは最初から貧しい国だったのに、ずっと民主主義を続けてきました。**特にインドはヨーロッパの主要国がすべて入るほど大きくて多様性に富んだ国ですから、単一国家は運営できません。そのために州というものが重要な存在となるわけですが、インドでは州のレベルどころか村のレベルにいたるまで、すべて選挙で代表者を選ぶという民主主義が行われてきました。インドでは選挙に負けてしまったとき、その結果を受け入れずに無効だと騒ぐようなことが一度も起きていないのです。**選挙に対する正当性が信用されているわけで、インドはたいへん安定した議会制民主主義体制を築いてきたことは間違いありません。なるほど、西側諸国と価値を共有しているぞと思えるわけですが、他方、インドといえば、カースト制があり、ひどい女性差別があり、貧しい人たちがたくさんいて、物乞いが町に溢れています。それを放置しておいて、どこが民主主義国家なのかという話もあります。**

「なぜ民主主義が必要なのか」といわれたとき、私たちは小学生の頃から「生活をよくするために政治に参加することが大事なのだ。それが参政権というものだ」と教わってきました。このことがインドでは、必ずしも結びついてこなかったのです。結果としての民主主義よりも制度としての民主主義といいますか、どうやって代表者を選ぶのかというところに重きが置かれてきたのです。カースト制はそれを可能にした仕組みのひとつです。低カースト、アウトカーストの世界に生まれた人たちは、どう考えても厳しい状態に置かれていて、生活もたいへん苦しい。私も最初にインドを訪問したとき、どうして彼らは声をあげないのか、この状態では民主主義には何の意味があるのだろうかと思いました。しかしよく考えてみれば、彼らはそれが政治の責任であったり社会の責任であるなどとは思っていなくて、カーストというものは本来職業であり、彼らは自分の置かれているカーストを、運命として受け入れている可能性があるのです。カースト制は、その意味で一種の社会安定化装置として機能し、多くの格差や差別も議会制民主主義は矛盾しないもの、むしろ共存するものになっているわけです。そのような風土、文化のなかにありながらも、ちゃんと選挙をし、選挙の結果を受け入れているのですから、立派な民主主義国のようにみえるのは仕方ありませんが、最近、この部分がどうも怪しくなっているのです。

～モディ政権下で進む「民主主義の後退」～

日本ではほとんど報じられませんが、モディ首相が訪米したとき、アメリカの議会やオバマ元大統領がインドの民主主義の後退と人権問題をもっと取り上げるべきだというふうにいっていました。たしかに**モディ首相は人気が高く、一貫して七割程度の支持率を有していますが、反面、彼はモディ政権に反対する勢力であったり、批判するメディアを徹底的に規制しています。ここが今、問題視されているのです。**たとえば、カシミールの自治権を撤廃し、それを二分割して中央政府の直轄下に置く。あるいは市民権法も改正し、インドに入国した違法移民に対してインドの市民権をあげる。一見、人道的に思えるような市民権法の改正ですが、ただし、ムスリムつまりイスラム教徒は除かれます。要するに、ヒンズー教徒の国にしようという発想が根底にある改正です。これらを批判する野党、市民団体、メディアは徹底的に規制されます。実際に今年、イギリスのＢＢＣが徹底捜査を受けています。

インドの怪しさは、様々な調査機関のデータからも明らかで、アメリカに本部を置くフリーダムハウスが毎年発表している**「自由度指数」のランキングでは、インドはこの数年、着実に低下しています。ロシア、中国よりはましですが、市民の自由がかなり制約されている状態です。**また、Ｖ－Ｄｅｍ研究所が作成している「自由民主主義指数」でも着実に低下していて、ロシア、中国寄りになっています。選挙による民主主義を行っていることが、これまでのインドの評価ポイントでした。たしかに選挙によって政権ができていますが、その後に野党を排除したり、野党のリーダーの議員資格をいきなりはく奪したり、名誉棄損罪で有罪にし、議員資格をはく奪したりしています。これはもう**権威主義国家の様相であり、インドは選挙権威主義国家だというふうに「自由民主主義指数」ではコメントしています。**

～インドにおける「自由」の著しい低下～

深刻なことに、**国境なき記者団が毎年発表している「報道の自由度指数」では、インドはロシアの下げ以上に下がっています。ほとんど順位も同じくらいです。**百六十位のラオスからインド、ジブチ、バングラデシュと続き、ロシアは百六十四位。そのロシアの下には、最下位の北朝鮮までわずかな国しかありません。**今やインドは、着実に北朝鮮レベルにまで新聞やテレビの取材の自由が制約されつつある、メディアにとって最も危険な国のひとつだ、といわれるまでになっています。**

日本のメディアも報道していましたが、今回のＧ20サミットでは、モディ首相は一度も記者会見に応じていないのです。岸田総理をはじめ、多くの首脳が記者会見を開いていたなかで、モディ首相だけが応じませんでした。彼は一方的に話すだけです。たとえばＳＮＳで、一方的に発言をすることに終始しました。批判的な意見をいわれたくないからです。Ｇ20サミットの日程がすべて終わったあと、メディアセンターに現れたモディ首相は、居並ぶ各国のメディアたちに何も発信せず、ただ手を振って立ち去っていったのは象徴的でした。

インドに「法の支配」があるのかということについても、元々からかなり怪しいといわれていましたが、ロシア、中国と大差ないように思えます。

アメリカの政府機関が発表している「宗教の自由度指数」をみると、北朝鮮、中国と同じレベルになっています。つまり、宗教の自由がない。インドはヒンズー教の国だと思っている人が多いと思いますが、決してそうではありません。たしかにインドの圧倒的多数はヒンズー教です。最新の国勢調査でも国民のほぼ八割がヒンズー教徒です。あとは一五％ほどがイスラム教徒で、残りは仏教、キリスト教、ジャイナ教等の信徒たちとなっています。ならばインドはヒンズー教の国ではないかと思ってしまうのですが、問題は一五％のムスリムです。なにせ人口十四億人の国ですから、一五％とはいえ、二億人くらいのイスラム教徒が存在することになります。数だけでいえば、インドはインドネシアに次いでイスラム教徒の多い国かもしれません。インドは独立以来、国の宗教というものがありません。その中で、イスラム教徒たちを排除するような政策をとれば、当然国は分裂してしまいます。そのために政教分離主義がインドの国是になっているのです。憲法にも「インドはセキュラー（政教分離）国家である」と最初に記されています。これが今、危機にあるということを、アメリカの政府機関が「宗教の自由度指数」で指摘しているのです。

経済の自由についても、インドには元々存在しないといわれてきました。市場は様々な規制でがんじがらめにされ、社会主義時代のようなものまであるのですが、モディ政権になってからも、これに変わりはありません。そのために、インドでビジネスをする人は一様にやりにくくてしようがないといいます。**経済の自由度でいえば、中国、ロシアと変わらないどころか、中国、ロシアのほうがましで、ランキングも百三十一位（二〇二二年）と、後ろから数えたほうが早い状態です。**

インドは民主主義であることを放棄しているのかといえば、そうではありません。「我々は民主主義である」としきりに強調します。バイデン大統領が二〇二一年、二三年と、二回の民主主義サミットにインドを招待したときも、いずれの場でもモディ首相は「我々は世界最大の民主主義国だ」といっています。ただし、その内容が問題で、**「民主主義とは精神でありエートスだ」、「インドこそが民主主義の母である」といい、彼らは「古代からインドでは民主主義が常識として受け入れられてきた。それはヴェーダ（聖典）にもあれば、古代の文書にもみんなで代表者を選んでいたと記されている。だからギリシャではなく、我々インドこそ民主主義の元祖なのだ。」といっています。正直、何をいっているのか、よくわかりません。**

今年のサミットで、インドは共同宣言に署名をしています。ただし、多くの箇所で留保をつけています。ロシア非難が入っているものはすべて留保です。ポイントになるのはインターネットの自由です。今回のサミット共同宣言のなかに、インターネットを政府が規制してはならないという項目が入っているのですが、インドはこれを受け入れませんでした。インドでは今、カシミールやマニプールなど騒乱が起きている州では、インターネットにアクセスできないよう規制していますから当然です。

政府による規制が行われているところをみれば、自由や民主主義といった価値を本当に共有しているのかは元々怪しいし、それがモディ政権下では特に怪しくなってきているのです。

～「利益」の共有という幻想～

そうはいっても、インドも中国を脅威と感じているはずだから、中国に対抗していく点では利益を共有しているとよくいわれます。

インドは一九六二年、中国と国境戦争を戦って負けています。海ではなく、陸で国境を接していますから、中国はインドにとって大きな脅威です。インドは、反対側の敵であるパキスタンには負けるわけがないと思っていますが、中国に対しては、

真正面から戦えばかなわないと認識しています。**最近の中国、とりわけ習近平体制になってからの中国は、インドに対して攻撃的な戦狼外交を展開しており、国境でものすごく軍事的な圧力をかけてくるようになりました。**

二〇一七年、ブータンと中国の国境地域ドクラムで中国側が一方的に道路建設を始めたところ、インドは即座に部隊を派兵しました。ドクラムに中国の道路をつくれば、中印戦争となったとき、中国はこれを利用して軍を走らせ、国を分断されかねない。そこで本来ここはインドには関係のない場所ですが、インドは道路建設を阻止するために、中国側が撤退するまでかなりの長期にわたる軍事対峙を続けました。

その後、二〇二〇年に衝撃的な事件が発生します。中国とインドの未解決国境地域ガルワン渓谷で中印の両軍が遭遇することによる犠牲者が四十五年ぶりに出ました。二十人のインド軍兵士が亡くなったのです。厄介なことに中国とインドの境目となる実効支配線はファジーで、インドと中国が考えている境界線の認識が違ってしまっているために、前々から互いに相手が入り込んできたと非難し合ってきました。しかし、お互いに認識が違うのだから入り込んできても仕方ないという感じで、四十五年間、不思議に両者に犠牲者は出ませんでした。しかも、インドと中国には長いあいだ信頼醸成措置が積み重ねられてきていて、実効支配線という認識があやふやなエリア、認識が違うエリアでは火器を持ち込まないと双方で合意をしていました。ですから、たまたまパトロール中にお互いの部隊が遭遇しても、殴り合いのケンカや石の投げ合い程度で済んでいたのです。

二〇二〇年に戦闘が発生したときも、互いに火器、銃器は装備していませんでした。ただ、どこまでが本当なのかはわかりませんが、「釘を打ち付けた木の棒で襲ってきた」とインド側は主張しています。崖の細道で中印の偵察隊が遭遇してしまい、インドの兵士が崖から突き落とされ、二十人の犠牲者が出てしまったというのが真相のようです。**この衝突により、インド国内で一気に反中感情が高まり、これは現在も続いています。**そして、中国とインドの部隊は実効支配線の全域にわたってにらみ合う状態にもなりました。多くのエリアで話し合いによる撤退が行われてはいますが、主に三カ所で中印の軍事対峙は今なお続いています。これらは富士山よりも標高が高い四千メートル、五千メートル級の山々もあり、十月、十一月になれば深い雪に埋もれてしまうエリアですから、インドにしてみれば軍を駐屯させるのは軍事的に大きな負担ですが、すでに二度の冬を過ごし、間もなく三度目の冬を迎えます。

国境での中国とのにらみ合いに加えて、インドは、ネパールなどインド周辺地域に中国が入り込んできていることを危惧しています。ネパール、ブータンは中国と接してはいるものの、ヒマラヤ山脈という地理的な影響もあって、文化・文明的には、経済的にもインドの影響力が圧倒的に強い国でした。ネパールに燃料を運ぶとなれば、ヒマラヤを越えるよりはインドから運び込むほうがはるかに合理的です。そのヒマラヤをぶち抜いて、中国がトンネルを通すのではないかという話も出ています。さらにはスリランカでは、借金のカタのような形で、ハンバントタ港が中国の国有企業に九十九年間、リースされることになりました。

「自分たちの庭」のはずのインドを囲む南アジア地域において、中国が経済的、軍事的、政治的に影響力を強め始めていることにインドは大きな警戒感を抱き、中国とパキスタンとの経済回廊のようなものにも警戒をしています。

当然、インドでも様々な対抗策を講じてきました。たとえば、コロナが流行しているとき、インドはアストラゼネカ製の新型コロナワクチンを複製し、国内での接種が進んでいないにもかかわらず同時進行で周辺国にも配ろうとしました。しかしその後、インド国内で感染爆発が起こり、国内優先に切り替えざるをえなかったため、これはうまくいきませんでした。あるいはモーリシャス、セーシェルなどのインド洋諸国に、インドは自国の軍事拠点をつくろうとしていましたが、これもうまくいっていません。諸々がうまくいかないなかで、中国はさらに影響力を行使し始めているわけです。

外交レベルでも中国はインドの大きな壁となっています。たとえばインドは国連安保理の常任理事国になりたいという希望を持っており、常任理事のうち仲の良いロシアをはじめ、フランス、アメリカ、イギリスはそれを支持していますが、中国だけが態度を明確にしない。それはおそらく「ノー」なのです。**世界の大国になりたいと思っているのに、中国はそれを潰そうとしているのだとインドは認識しています。**

経済面においては、モディ首相は二〇一四年の首相就任時には中国をパートナーだと考え、中国からの投資を歓迎し、それが貧しい農村の人々の生活をよくしていくだろうと期待をしていました。事実、農村でも中国製のスマホや冷蔵庫やテレビが普及し、暮らしはよくなりました。しかしその結果、インド国内の産業がすべて潰れてしまいました。慌てたモディ首相は、スマホはインド国内で生産することとし、WTO（世界貿易機関）違反をしてまでもスマホの完成品の関税を引き上げました。その結果、中国メーカーもインドで製造するようになり、今では九五％がインド製になっています。残りはサムスン、中国四メーカーです。アップルはほとんどありません。OPPO、Xiaomiなどの中国メーカーもインド国内で生産しています。

モディ首相はよく「メイク・イン・インディア」、つまりインドでモノづくりをしようといいます。スマホは、たしかにメイク・イン・インディアの成功例ともいわれますが、それは最後の完成品だけで、ディスプレイ、センサー、半導体といった部品はすべて中国から輸入したものです。つまり、メイク・イン・インディアを進めれば進めるほど、中国からの輸入は増えていくというジレンマに陥ってしまうわけです。インドが中国との協定を避けて、RCEP（地域的な包括的経済連携）から抜け出してしまったのも当然といえば当然のことです。

国内の反中感情が高まり、中国を追い出せという雰囲気になっているにもかかわらず、中国の経済依存から抜け出せないため、モディ首相は、次に「自立したインド」というスローガンを掲げます。つまり、サプライチェーンの脱中国化です。そしてその協力先を、インドは日本、アメリカに期待しています。

ここまで聞けば、対中国という視点では、インドと利益が一致するかもしれないと思ってしまうかもしれませんがどうでしょうか。地政学的には、私たちは日本を中心にした世界地図を思い浮かべ、東シナ海、尖閣、南シナ海、そしてインド洋に中国の脅威をみています。その目線で、中国という脅威に対して日・米・豪・印同盟をインドに呼びかけてきたのですが、**インドにしてみれば我々は海洋国家であると同時に大陸国家でもあるというのが本音で、海側よりも陸上の脅威のほうが重要なのです。**

たしかにインドの周辺で今起きていることをみれば不安だらけです。前出のとおり中国と国境で対峙し、パキスタンとの対立関係は続き、味方につけたかったミャンマーはクーデターで軍事政権となり、ア

メリカから「付き合うな」といわれている。そこへ中国が入り込んで、自分の庭がますます荒らされている状況になっているわけです。さらには、パキスタンの向こうにあるアフガニスタンでは、パキスタンに近いタリバン政権が復権しています。特にパキスタンの後ろに位置するイランは、インドにとって絶対に欠かせないパートナーであり、味方に引き込むことが重要であるにもかかわらず、アメリカの制裁が解けていないなかで関係が一向に改善していません。かつてインドは一番のイラン原油購入国でしたが、トランプ政権時に制裁を科したため、それが今はゼロになっているのです。

そのような中、**古くからの友人であるロシアが重要な存在となっているというのが今のインドの状況なのです。しかしそのロシアは、ウクライナの戦争が長引くにつれ中国に接近していきます。そうなるとインドが中国と戦争をするとなったとき、ロシアは中国に忖度し、兵器を供与してくれないかもしれません。インドは、ロシアは泥船であることはわかっていても、今はその泥船にしがみつくしかないのです。**これが今のインドとロシアの関係だと理解すればよいかと思います。

インドをはじめグローバルサウスは、新興国であり途上国です。このことが今回のサミットでも重要なポイントになりました。彼らにしてみれば、**ロシアのウクライナ侵略は問題視しているが、私たちを危機に陥れているのは、それによる食糧価格、エネルギー価格の暴騰であるという理解になります。西側諸国との間のこのギャップは、WTOでのルールづくりを筆頭に、いろいろなところに現れています。**世界経済の仕組みをどういうふうにしていくのか、あるいは気候変動問題をどのように処していくのかというところに先進国と途上国の一番の利害対立が現れますし、西側先進国とインドのようにグローバルサウスのリーダーを自認する国とのあいだには当然の鮮明な違いも出てきます。**つまり、利益を共有していないわけです。**

～インドの実力 ― 現在と未来～

これまでお話をしてきたようなことを考えれば、**中国は脅威であると考えている点は同じであっても、中国に対抗するエリア、分野では、決して利益も価値も一致していないのです。ならばインドとは付き合わなくてもよいかといえば、そういうわけにもいかない。今回のサミットでインド側の注文をG7各国が受け入れてしまったのも、インドを放っておくわけにはいかなかったからです。インドの実力、将来をG7各国がわかっているのです。**

そもそもインドは、南アジアのなかでは圧倒的な存在です。**ひとつは、地理的にインドだけが南アジアのすべての国とつながっているという点です。**他の南アジアの国々、パキスタン、ネパール、ブータン、バングラデシュ、スリランカ、モルジブはインドを通らなければ互いに行き来することもできない。**つまり、インドの中心性が明白になっている。もうひとつは、人口、面積です。加えて、よくいわれているのが「今後の成長」です。**若年層の多さがひとつのポイントで、あれだけの人口にもかかわらず、平均年齢は二十九歳なのです。二十歳から二十四歳までの男性が六千万人もいる。男女を併せれば、その年齢層の人口が一億二千万近くというものすごい規模になります。そしてその年齢層の人たちが働き盛りの年齢を迎えていきますから、消費生産年齢の分厚さがあと二十年、三十年と続く。これを人口ボーナスといいますが、それが中国の三十年遅れでやってくるのです。

インドのGDP伸び率をみても、二〇〇〇年から〇九年までは中国より下位を漂っていましたが、二〇一〇年以降、中国と肩を並べ、むしろインドが上回るようにもなってきました。中国で人口ボーナスが終わり、少子高齢化の段階に入ったのに比べて、インドはこれからが人口ボーナスに入っていくということがわかります。

去年の速報値では、インドのGDPはイギリスを抜いて五位になっています。IMFは、二〇二五年にドイツを抜き、二〇二七年には日本をも抜き去り、インドが世界第三位の国家になると予測しています。軍事費ではとうの昔に日本の防衛予算を上回り、アメリカと中国に続く世界第三位の軍事予算を使っている国となっています。インドはハードパワー以外にも、映画、文明遺産など様々なソフトパワーにも恵まれた国です。

今後のGDP予測をみると、二〇二七年はアメリカと中国の二強が均衡状態となっています。したがって鍵を握るのは第三位になったインドです。さらに二〇五〇年の予測では、インドはより米中二強に近づいていき、軍事費でも猛追します。やはり、これからの将来、鍵を握っているのはインドということになります。

インドは日米豪との同盟も、中ロとの同盟も望んでいません。望ましいと考えているのは、どちらからも美味しいところ取りをすることができる、今のようなフリーハンドの立場なのです。これを「戦略的自立性」といい、特定の大国に縛られないことを望んでいるはずです。どの国とも同盟関係を結ばないけれど、どの国とも付き合うマルチアライメントです。多くの国々と関係を深めていく政策を、これからもインドは取り続けていくのだろうと思います。

～インドとの向き合い方 実利、経済分野～

特定の大国に縛られず、多くの国々と関係を深めていこうとする国と向き合うには、まずは「価値と利益を共有する」という幻想は捨て去ることだと私は思います。彼らも実利を追っているのですから、我々もまずは実利を得られるところで協調していけばよいのです。両者の実利といいましても、軍事分野では日本のできることは限られていますから、やはり経済分野です。

たとえばコネクティビティ・インフラです。原子力発電などの発電設備ばかりが注目されているのですが、一方で**インドの電線はもう無茶苦茶で、蜘蛛の巣状になっており、送配電ロスが極めて大きい。こういった分野で日本が協力できる余地は大いにあるはずです。**また、サプライチェーンでも協調し合えます。**中国に依存しないサプライチェーンは双方にとっての実利となります。**高い中国依存度のままでは中国と戦争ができませんから、インドは、必死になってサプライチェーンの強靱化を進めているのです。さらには周辺国の債務問題です。中国の「債務の罠」への対処をインドは求めています。先ほどの電線であったり、新幹線であったり、あるいは半導体もしかり、何か特定の分野で、日本の技術が無ければ立ち行かないという状況を今のうちにつくり出しておくことが、これからインドと向き合っていくための重要なポイントになると思います。

これは「価値を巡る問題」ともかかわります。**欧米はしばしば上から目線で「おまえらの民主主義はなっていない」、「人権問題はどうなっているのか」などといいますが、インドはこれにすごく反発をします。**イギリス・BBCの問題がそれです。今年初め、BBCがモディ首相に批判的なドキュメンタリーを報じたところ、即座にインドはインターネットを遮断して放送をみることができないようにし、BBCのインド支局に税務捜査まで入れました。嫌がら

せ以外のなにものでもありません。また、誰もが知る日本の大手全国メディアにも、インドは似たような対処をしました。そうやってプレッシャーをかけていくのです。

今回のサミットで、日本の岸田総理はこういった価値観を巡る問題は「取り上げない」という対応をしました。おそらく「グローバルサウスに価値観を押しつけることはできない」という立場をとっているのだと思います。インドで開かれた世界問題評議会でも、岸田総理は「地球上には多様な価値観、多様な文化、多様な歴史があり、これを完全に理解するのは容易ではない」と、同じようなことをいっています。また、「国際社会での自由で開かれたインド太平洋地域をつくっていこう」というふうにもいっていますから、国際的な意味での自由、法の支配を重んじ、外国内の問題には触れないとするのが日本の姿勢だと思います。

余計なことに口を出さないのは、一見、賢明な対応のように思えますが、それは欧米と違い、日本の社会はそもそも人権問題に関心がないためにできる対応に過ぎません。三十年前であれば、中国の内政問題に関心を寄せることなく、ビジネス一本でやることができましたが、今、人権問題はもう、ビジネスと不可分に結びついており、それはできません。実際、新疆ウイグル自治区問題でユニクロは撤退せざるをえなくなりました。同じことがインドで起きているのだとすれば、つまりそれはもうインドでビジネスはできないということになります。

環境、社会、企業統治を考慮した投資活動や事業活動を指すESG、または人権問題に対する企業の適切で継続的な取り組みを指す人権デュージェリエンスの観点からすれば、ビジネスのリスクはインフラだけではなく、インドには人権という問題もある。とはいえ、インドという市場を放置するわけにはいかない。そのためには、インドの「第二の中国化」を防ぐ必要性が大いにあると、私は考えています。

（令和五年九月十五日　講演抄録文責在記者）

CLUB GRAF　くらぶ・ぐらふ

◎午さん会（7月7日）

『クロアチア 今も残る 独立戦争の傷跡と 世界を魅了する絶景の数々』

日本クロアチア交流協会　代表理事　**山崎　エレナ** 氏

◎午さん会（7月14日）

『運輸安全の観点からみた 知床遊覧船沈没事故 ～知りえた事実と対策～』

関西大学　名誉教授　**安部　誠治** 氏

◎午さん会（7月28日）

『AIの急激な進化が変える世界 ～待ったなしのAI活用人材育成～』

関西学院大学　副学長・情報化推進機構長　**巳波　弘佳** 氏

◎午さん会（9月1日）

『国家安全を強調する 中国の社会統制政策 ～最近の情勢の分析～』

東京大学大学院　総合文化研究所　教授　**阿古　智子** 氏

倶楽部だより

中央電気倶楽部創立一一〇周年 記念式典開催

去る十一月二日（木）、約一二〇名の会員の皆様が倶楽部に集い、創立一一〇周年を祝した式典を開催いたしました。

開会に当たり加藤好文理事長が、「本日、創立一一〇周年の佳き日を迎えることができますのは、歴代の先輩諸氏のご尽力や、ここにお集まりいただいている、会員様をはじめ、関係各位のご支援の賜物であり、重ねて感謝申し上げます。」と、感謝の言葉を述べました。

続いて藤原歌劇団の山口安紀子さんをはじめ、五名の音楽家による素敵な歌声と演奏をご堪能いただきました。

その後、三階大食堂において元理事長の土井義宏様（株式会社きんでん 取締役会長）の乾杯のご発声により祝賀パーティが開宴し、なごやかなひと時を過ごしました。

会員の皆様におかれましては多大なご祝賀、ご協賛を賜り、またお忙しい中ご参会をいただき心より厚くお礼申し上げます。

土井 義宏 氏

加藤 好文 理事長

出演者の皆様

図書だより

◎図書室新企画登場！

「オンラインでスマホ教室」参加者募集!!

日　時　二〇二四年一月二十九日（月）十四時～十五時

場　所　中央電気倶楽部　二階　図書室

定　員　八名（先着順）

参加料　無料

持ち物　必ずご自分のスマートフォンをお持ちください。（機種は問いません）

申込み　二〇二四年一月十日（水）までにお申し込みください。

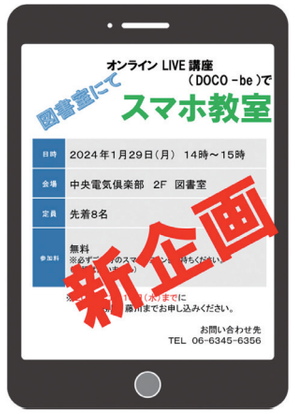
講座のご紹介

スマホを快適・便利に使うためのノウハウや詐欺対策サイトの見抜き方など、専用端末の画面を通じて、外部講師がオンラインでわかりやすく説明して下さいます。

また一人一人の質問にも答えていただけます。

今回、当倶楽部だけを接続して開催しますので、安心してお気軽にご参加ください。

※お申し込み・お問い合わせは、事務局藤川まで。



写真部撮影会「等持院」で開催

十一月十六日（木）に写真部は、暦応四年（西暦一三四一年）、足利尊氏が天龍寺開山夢窓国師を開山にお迎えして、衣笠山の南麓に創建した紅葉と庭園が美しい「等持院」で撮影会を開催しました。晴天の中、枯山水の庭園が広がり、静かに佇むモミジを鑑賞することができました。撮影会後、「割烹 竹茶寮」での昼食会では、おいしい湯豆腐をいただきながら、写真談議に花を咲かせました。

等持院 撮影会にて

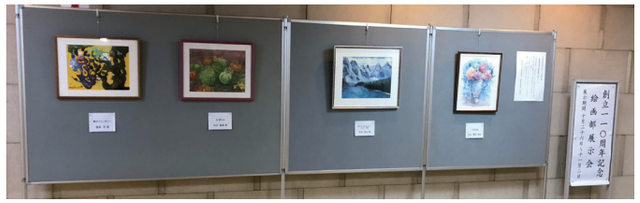
倶楽部創立一一〇周年記念 絵画部展示会

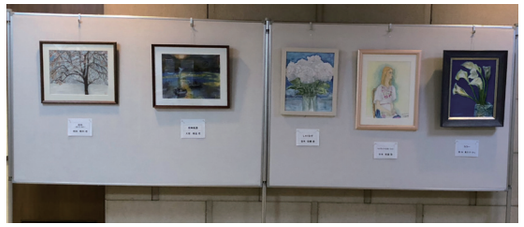
絵画部(水彩画)は、十月二十六日(木)より十一月二日(木)まで西館囲碁室前で倶楽部一一〇周年記念展示会を開催いたしました。

たくさんの方々にご観覧いただきましてありがとうございました。絵画部部員一同感謝申し上げます。

今後も良い作品を描いてまいりますのでよろしくお願いいたします。

また新入部員も募集しておりますので、ご興味のある方は入部をお待ちしております。





◎絵画部(水彩画)教室

十一月度(一日・水曜日)の画材は、「静物：風景」でした。

次回は十二月六日(水)、「人物：モデル」です。

◎囲碁部例会(十一月十一日)

成　績

三　勝　三　段　鳥養　憲次　君
二　勝　八　段　山田　進　君

(参加者　五名)

(次回例会は十二月九日(土))

◎将棋部例会(十月二十八日)

成　績

三　勝　六　段　井上　清志　君
二　勝　六　段　楠本　光秀　君

(参加者　五名)

(次回は初挿し会(指導あり)一月六日(土))

◎撞球部秋季大会(十一月四日)

成　績

優　勝　吉川　尚美　さん
二　位　雑賀　幹人　君
三　位　石井　大三　君
四　位　大竹　一夫　君
五　位　池端　博　君

(参加者　十六名)

・優勝コメント

思いがけない、優勝を頂き、びっくりしております。

〝終り良ければすべて良し〟。私の座右の銘です。チャンスは、必ず各人に平等に与えられるものと信じているのです。

それには、チャンスが与えられた時、自分の力が出せる様に技をみがいておく事も大切な事でしょう。しかし言うは易し、行うは難しで、私は失敗の多い日々でしたが、残された日々、幾許もなく、せめて好きなビリヤードを楽しく、皆様と共に、究めて行ける事を願っております。

今後共、よろしく御指導下さいます様お願いして、御挨拶にかえさせて頂きます。

(次回例会は十二月二日(土))

◎俳句部

第八百五十五回　**いなづま句会**

俳誌「かつらぎ」主宰　森田純一郎先生　指導

令和五年十月二十一日

兼　題　当季雑詠五句

選　者　吟

地震(ない)の海今は凪ぎゐて鳥渡る
等伯の生(あ)れし地洗ふ秋の雨
鶏頭の雨垂れまでも赤きかな
宿酔に金木犀の憂かりけり
能登に立つ偕老に秋深まりぬ

いなづま句抄

○泣き相撲力士の胸に抱かれけり　冨山　勝幸
○名月やひとり祀るにまだ馴れず　難波　正行
○稔り田を前にかやぶき屋根の寺　野尻　弘輔
○巫女一人宝仏殿に手焙す　渡邊　建彦
○秋深し一人住まひとなる隣家　木下　貴友
○里の秋きしみて忙しコンバイン　前田　便利
○モネほどの高き藁塚見あたらず　東代　舞
○初鴨や水より杭に長居せり　広田　祝世
○池の舟朽ちて菱の実採らぬまま　出店智恵呼
○汀女忌や江津湖は育つもの多し　奥村　恵子
○秋潮を待つ回廊の舫ひ舟　友岡　淑子
○詣でたる青畝の墓に日向ぼこ　前野美枝子
俺だけのまん丸月や屋根狭間　留岡　寛

(○印選者選)

(注)

鳥渡る(とりわたる)：秋に冬鳥が北国から日本に飛んで来る。また夏鳥は日本で繁殖して秋に南の暖かい国へ群れを成して渡ること。(季語)

等伯(とうはく)：安土桃山時代から江戸時代にかけての絵師、長谷川等伯のことで、能登国、七尾の生れ。三十歳ころに上洛し、長谷川派の始祖となる。

宿酔(しゅくすい)：二日酔いのこと。

偕老(かいろう)：夫婦が仲良く共に老いるまで連れ添うこと。

泣き相撲(なきずもう)：一歳前後の幼児の泣き声を土俵上で競わせる神事。西宮市の越木岩神社でも行われている。(季語)

汀女忌(ていじょき)：俳人、中村汀女の忌日。熊本市の江津湖の近くに生れ、昭和を代表する女流俳人で、高浜虚子に師事。(季語)

藁塚(わらづか)：稲の収穫後、田に藁束を積み上げたもので、モネの絵画「落穂ひろい」に見られる。(季語)

初鴨(はつがも)：鴨の渡りは九月から始まっていますが、最初にやって来る鴨の事。(季語)

青畝(せいほ)：高浜虚子の弟子、阿波野青畝で4Sの一人。昭和二十六年、中央電気倶楽部の俳句部の選者として迎えました。

日向ぼこ(ひなたぼこ)：縁側や日溜りで、冬日を浴びて暖まる「ひなたぼっこ」の事。(季語)

他倶楽部案内

清交社の午さん講演会のご案内

会　場…ANAクラウンプラザホテル大阪 五階ガーデンルーム

時　間…十一時三十分～十三時三十分

十二月五日(火)

講題『京菓子を通して 美しき日本の心を学ぶ』

京菓匠 笹屋伊織　十代目 女将 田丸　みゆき　氏

十二月十二日(火)

講題『激動の二〇二四年に備えて』

同志社大学法学部教授　村田　晃嗣　氏

※状況により中止になる場合があります。

◆出席ご希望の方は、当倶楽部事務局に二日前までにお申し込み下さい。

◆会費／三、〇〇〇円(昼食代・消費税込後日精算)

前日の午後五時以降は、キャンセル料が発生します。

☆ネクタイ着用